

岐阜県美術館 研究紀要 07

研究ノート

絵本作家・わかやまけんの岐阜時代から
紙芝居制作、図書館活動と教育について

鳥羽 都子

絵本作家・わかやまけんの岐阜時代から紙芝居制作、図書館活動と教育について

岐阜県美術館学芸員 鳥羽 都子

1. はじめに

本稿は、若山憲（1930-2015）の原点といえる、岐阜時代、紙芝居の仕事、図書館活動及び教育の仕事を叙述するものである。

2023年に岐阜県美術館で開催した「こぐまちゃんとしろくまちゃん 絵本作家・わかやまけんの世界」展のための調査で、若山が岐阜市内でデザイナーをしていた頃のポスター写真や生家跡等が発見された。20代半ばで上京してから絵本の仕事が本格化するまでの紙芝居の仕事は創作に大きな影響を与え、生涯における作品数としてもかなりの部分を占める。さらに、これまでほとんど知られていない一面として、地域図書館の創設に関わる活動と、専門学校での後進指導についても調査した。

若山をめぐる研究は、「こぐまちゃんえほん」シリーズなど一部の作品に着目した論考は見られるものの、作家論については緒に就いたばかりである。若山の現役時代を直接知る人が少なくなりつつある今、本稿では図録には未収録の、岐阜時代・紙芝居・図書館活動・教育活動も拾遺し、若山憲研究に寄与することを目的とする。

2. 若山憲の岐阜時代

2.1. 戦争の時代の少年 ―「本も机も灰になってしまった」

若山は1930年1月末の雪の日に生まれた。生家は金華山の麓、献上鮎鮓を徳川將軍家に運ぶ経路であった「御鮎街道」に面した岐阜市・美園町の商家である。現在は往時をしのばせる建物が点在する静かな通りだが、若山の生まれた頃は荷馬車が行き交う街道筋であった。生家は、間口が狭く奥に長いうなぎの寝床の造りだった。この原風景は、若山の代表作の一つ『きつねやまのよめいり』（1968）の構想の源の一つとなった。きつねが持つ提灯の灯につながっていく生家の記憶を若山は次のように描写している。

城下町岐阜。（中略）ぼくの家も商家で、奥へ奥へと細長くつづいた家の中は暗く、天窗がついていた。（中略）母がかまどの前にしゃがみこんで、火のまわりをよくしながら話しかけてくる。聞きながらも、うなずきながらも、目はじっとゆれる焰からはなれない。ⁱ

隣家の同級生によれば、若山は礼儀正しく、学校の先生に「大成する」と評されるような生徒だったという。ⁱⁱ 若山が小学校2年生のときに日中戦争が勃発し、日本は戦争に突き進んでいく。1938年、内務省は出版事業者に「児童読物改善ニ関スル指示要綱」を通知し、児童書にまで言論統制が始まった。次第に資源の不足から多くの雑誌が休刊を余儀なくされ、本好きな若山少年が触れられたのは、紙も造りも粗悪な戦争翼賛の内容のものになっていった。

終戦直前の1945年7月、岐阜市を2回の空襲が襲った。若山が通った明德国民学校（2012年、本郷小学校との統合による明郷小学校の開校に伴い廃校）と実家が相次いで焼失してしまった。被災者は市の人口の4割を超え、市域の7割以上が焼失する甚大な被害だった。この経験が多感な少年に深い傷を残したことは想像に難くない。若山は、「夜の空襲で焼けてしまった。ぼくの生家も同じ時に灰になり、本も机も灰になってしまった」ⁱⁱⁱと、「机と本」を失ったことを随筆や日記に何度も書き残している。読書への思いの強さが胸に迫る。この随筆は、次のように締めくくられている。「少年は、国家からの、体制からの、集団からの思想を拒

絶し、自分の心に、自分でつちかった思想をよりどころにするようになった」。戦時下に少年期を過ごし、15歳で空襲と敗戦に遭った経験は、集団に属さず個人の技量を持つ生き方、絵本創作によって、「人間らしく、自分の手を動かして生きていこう」¹⁹とする原体験となった。

2.2. 敗戦の年の冬、童画と田邊四郎に出会う

敗戦の年の暮れ、15歳の若山は淡い黄色の表紙の『週刊少国民』(fig.1)に目をとめる。スキー板を手にする少年を描いた「非常に暖かく明るいもの」²⁰が目にとびこんで、「少年の瞳と少年の僕の瞳は結ばれていた」。この出会いが若山の道を決定づけた。

乏しい小遣いから買い求めて頁を繰ると、短歌や詩、アメリカ民話や天体観測の話、クロスワードパズルなど、知的ですがすがしい誌面が続く。表紙は伊勢正義。川上澄生の版画が飾る北米民話、清水崑の漫画物語、吉田甲子太郎の冒険譚の連載第1回が載っており、軍国主義から一新され、希望に満ちた内容だった。若山は、すぐに愛読をはじめ売り切れの時は書店を探し歩いた。続々と創刊される他の雑誌も買うようになり、幼稚園への配本しかなかった絵本「キンダーブック」は、代理店を探し当て、特別に購入をさせてもらうという熱のいれようだった。

その頃、おじの測量の仕事など、親族の仕事をいくつか手伝ったりしていたものの、体力がない自分が働くには、得意な絵の仕事に就くのがいいだろうと考えていた。『週刊少国民』に出会ったのと同じ12月、「絵の好きな少年を求む」という小さな新聞広告を見つけ、屋外看板会社・彩工社(岐阜市元町、現在は移転)に走った。若山が持参した絵を見た社長・小林良一(1907-1978)に「明日からおいで」と言われ、絵の世界に足を踏み入れる。筆一本あれば仕事ができる時代で、画家志望だった小林がサンタクロースの顔を手早く描き、若山はその輪郭の上に絵の具を塗った。今でいうディスプレイ業のはしりのような仕事だった。小林は「若山君は才能があるな」と漏らしていたという。なお、同社は現在も営業を続けている。

彩工社では、大きな出会いがあった。挿絵画家を目指して東京で学んだ経験のある田邊四郎(1916-1982)である。田邊青年は、15歳程年下の若山にデッサンを教え、画集を見せ、ポスターデザインや映画のことも熱心に語った。田邊に勧められて、若山は、安泰(1903-1979)、川上四郎(1889-1983)、武井武雄(1894-1983)、脇田和(1908-2005)らの童画に興味を拡げた。特に、初山滋(1897-1973)と脇田和は特別な存在だったようだ。モダンな線と色彩の初山滋、あたたかな色面構成の脇田和は、兩人とも「色彩の詩人」と称される。若山は田邊に芸術への扉へと招き入れられ、初山や脇田ら童画家に目習いしたといえるだろう。

2.3. デザイン事務所で本格的にデザインを学ぶ

若山は1948年頃から1953年(18~23歳)頃まで、加藤孝司(1916-1998)の主宰するデザイン事務所に勤務した。木造町の事務所は若山の生家から徒歩10分余り。岐阜はまだ焼野原だったが、事務所はセンス良く整理され、美しいポスターが壁に貼られていたという。

田邊と同年の加藤は、戦前、国が公募するポスター図案に幾度も受賞するなど全国的に活躍している。fig.2はその実力が証明されるもので、内閣情報部が募集したポスターに720点の中から佳作に選ばれた作である。当時としては特殊な技術と見なされ一目置かれたエアブラシ技法を用いたものだ。

加藤は戦後まもなく画工から独立開業したが、「看板業」ではなくデザイン事務所と称したのが最先端だった。後に日宣美(日本宣伝美術会)の審査員を務め、シルクスクリーン印刷の大胆な構成と配色を得意とし、ポスターはMoMA(ニューヨーク近代美術館)に収蔵されるなど、岐阜のグラフィックデザイン界をリードした人物である。地元の銀行



fig.1 朝日新聞社『週刊少国民』新年増大号、1945年12月



fig.2 加藤孝司デザイン『寫眞週報』1938(函館市中央図書館所蔵)



fig.3 加藤孝司デザイン「十六銀行」2月1961

や百貨店など一流の広告デザインに携わる加藤の事務所で、若山の力は磨かれていった。fig.3は加藤が長年手掛けた地銀・十六銀行のポスターであるが、日本的な色と知的な構成に優れ、このデザイン美学が若山にも伝えられていることが感じられる。

見やすく読みやすく絵と並んだときにきれいに感ずる書体を探すこと、文字の送りや行間を決めることは、デザイナーと絵本作家の両者にとって大切な仕事の一つである。また、物語のエッセンスを抽出しいかに伝えるかという絵本作家必須の感性はまさにグラフィックデザイナーの仕事と共通するものがある。若山は、絵本作家を目指す後進達に向けて「絵本作家はデザインのセンスが必要なようですね」⁹⁾と述べていることから、若山が絵本創作において重要視した創作哲学といえよう。

加藤の長男・由朗は、事務所裏手の寺の路地で若山に遊んでもらった記憶がある。後年、由朗が東京に就職した折には練馬区の若山家を訪ねた。1980年、由朗に子どもが生まれたときには、若山は「こぐまちゃんえほん」シリーズにサインをして送った。長く続いた交流や、家族アルバムに貼られた若山の写真(後述)について、由朗は、「父・孝司は、プロパガンダポスターで戦意高揚に協力した経験から、平和な日本の表現を拓く若山らの活躍を応援したかったのかもしれない」と語る。加藤の事務所は由朗が受け継いでいる。

2.3.1. 新資料 — デザイナー時代に手がけたポスターデザイン

岐阜でのデザイナー時代に若山がどのような仕事をしていたのか不明だったが、このたびの展覧会を機に、若山が描いたポスターの写真5点(fig.4、5)が加藤のアルバムから発見された。

拡大すると「けん」とサインされており、書体が「こぐまちゃんえほん」シリーズや、雑誌の表紙の仕事に記されるものと類似していることから明らかである(fig.6)。当時は看板や図案と言われていたグラフィックデザインに誇りをもって取り組んでいたことや、作家としての意識の芽生えがうかがえる。

特に、雪の結晶が舞い落ちるなか、少女が手袋を編んでいる「子ゆびもあたゝかそう」は童画を思わせる表現で、その愛らしさは際立っている。若山は絵本の仕事でもことに雪の描写が多く、繊細で美しい作家であるが、このポスターにそのルーツを見ることができる。

若山は18歳の頃から岐阜市展に出品し、「毛糸」(1951)「蜂蜜」(1952)「キクツルシャツ」(1953)という作品の入選記録が残っている。このたび発見されたポスター写真のうち、2枚には、ポスターの下に「ミネラルポスター 若山憲」「養蜂ポスター 若山憲」と題箋が付いており、モチーフからみて、発見されたポスター写真は市展出品作と関係がある可能性が高い。

岐阜は近代養蜂発祥の地であり、今も中小の養蜂家が多いが、若山の生家はその頃、親類の家業の蜂蜜を商っていた。そのためか蜂蜜のポスターが多い。また、岐阜は地場産業として繊維業も盛んであり、シャツや毛糸などポスターの画題に地域を代表するものを選んでいる。師の加藤が洒脱でクールなデザインを得意としたのに比し、若山のポスターにはどこか優しさがあるのが特徴といえるだろう。

アルバムに貼られたスナップは、勤務時のもの(fig.7)だけでなく、若山が東京で結婚した妻と長女と3人で写っているものもあった。若山が新居での家族写真を送り、加藤は大切に家族アルバムに貼り込んでいたのである。

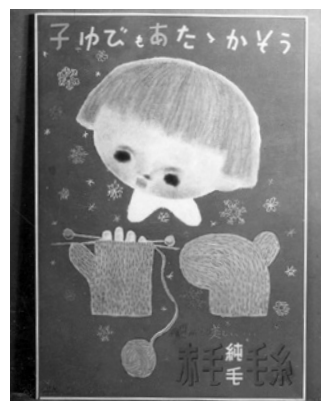
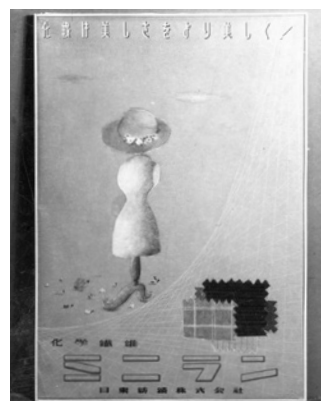


fig.4 若山憲デザインポスター3種
「化学繊維ミニラン 日東紡績」
「子ゆびもあたゝかそう 赤毛
純毛糸」
「ハチミツ 日本養蜂協会」

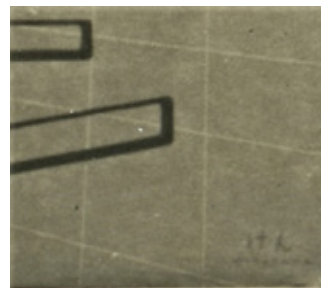


fig.6 岐阜時代、ポスターのサイン



fig.5 若山憲デザインポスター2種「ミネラル」「養蜂」

2.3.2. 市展の審査員のひとことから夢に向かうことを決意

ー「デザインの童画をつくるんだ！」

戦後まもなく始まった各地方の公募展は、そこでの批評を糧として更なる高みを指す発表の場であり、登竜門として果たした役割は大きかった。岐阜市展の審査員や出品者には、岐阜県美術館の所蔵作家である日本画の加藤東一（1916-1996）、油画の坂井範一（1899-1981）、坂倉新平（1934-2004）、坪内節太郎（1905-1979）、彫刻の三輪乙彦（1930-2021）、油画・モザイクの矢橋六郎ら（1905-1988）の名前もみえることから、往時の熱気がうかがえる。

その頃、デザイン部門のある公募展は少なかったが、加藤が仲間らと結成した岐阜商業美術集団（GCA）の働きかけもあり、地方都市には珍しく、岐阜市展では第1回（1948）から商業美術部門（グラフィックデザイン）が設けられた。職人仕事やものづくりが盛んな土地柄から、プロダクトや意匠へのリスペクトがあったと考えられる。

この市展が若山の道を開くことになる。入賞を通して自信を深めていき、第5回市展では、師の二人よりも高位の最高賞をとる。第4回～6回の入選及び受賞記録は別表の通りである。

岐阜市展	若 山	田邊、加藤
第4回展 1951 (S26)	市長賞《毛糸》	無鑑査《イーゼル・ペイント》田邊四郎 無鑑査《十六銀行》加藤孝司
第5回展 1952 (S27)	市展賞《緑の日》	市議長賞《交通安全》加藤孝司 会頭賞《テンペル絵具》田邊四郎
第6回 1953 (S28)	GCA賞《表紙デザイン》 入選《キクツルシャツ》	

市展では、さらに若山の道を決定づける邂逅があった。資生堂のデザインなどで高名な山名文夫（1897-1986）が招待審査員を務めた折に、出品者らは山名に自作を一言批評してもらいたいと詰めかけ、公開審査のようになった。山名は、若山に声を掛けた。その瞬間の決意を若山は次のように書き残している。ここで特に注目しておきたいのは、「デザインの童画」という独自の言葉であろう。

審査にこられた東京の山名文夫氏は、ばくの作品の前で「自分のもっとも好きな道にきめるのですね」そのシュンカン。すべてがきまった。いや、きめてしまっていた。「デザインの童画をかくんだ」受賞式の夜に、心の中の誰れかとさげんでいた。^{vii}



fig.7 加藤のアルバムに貼られていた若山憲

戦争、グラフィックデザインのパイオニアである田邊四郎・加藤孝司の2人の師、デザインとの出会い。地元の公募展から絵本作家を目指して上京を決意するまで、創作の原点が岐阜にあった。若山が上京したのは、山名に道を問われた翌年、24歳の時である。

3. 紙芝居で磨いた多彩な表現

―「あまさの裏側にウルサイくらいの構成力がある」

上京後、若山は教科書の挿絵の仕事等と並行して、1950年代後半から70年頃にかけて多くの紙芝居を手がけている。1966年には、若山ら6人が絵を手がけた『宮沢賢治童話名作集』（全7巻）が、シリーズ全体で第5回五山賞 作家賞・画家賞を受賞した。同賞は、紙芝居創始者のひとりである高橋五山（1888-1965）の名を冠し年間優秀作に贈られるものである。

紙芝居の絵は、離れた所から観る子どもたちにとって見やすく、物語が動き出したと感じられるよう、強調や省略、ダイナミックな場面転換、遠景やクローズアップを織り交ぜた大胆な構図、物語の中にあるおもしろさを場面にして連続して組み立てる構成など、特有の技巧が求められる。

若山は、クリスマス話にはアメリカ挿絵風、童話には擬人化した動物、民話には墨絵風など、一作ごとに工夫を重ねた。

当時は、原画から画工が印刷用に版を描き起こしていたため、画工の力量によって、原画と刊行物とでは味わいがかなり異なってしまう。原画と刊行物を比較したものがfig.8である。品よく愛らしいレタリング、春霞の柔かいグラデーションの空、後年「どうしてもこんなにかわいいんでしょうね」^{viii}と好んで描いたうさぎなど、若山の腕の冴えが既に現れている。「山、雲の線ヤワラカク」といった画工への指示も鉛筆で書きこまれている。原画が作者に返却されたり保存されたりすることは少なく、若山の最初期の肉筆として非常に貴重な資料である。

続いて、「こぐま」の描写を確認したい。1960年、1964年には、口吻が突き出た熊らしい肢体が描かれている（fig.9、10）。一方、1970年の「こぐまちゃんえほん」シリーズ第1集では、ぬいぐるみのクマを主人公にし、その造形は模索の末に生み出されているが（fig.11）、単純化された安易なイラストや水増しの甘さではないことが両者の比較から見て取れる。かたちを整理しデフォルメする能力が生み出した、まさに「デザインの童画」表現というべきであろう。子どもが受け取る「ほんとうらしさ」を、紙芝居の観客より下の年齢層である幼児のために、はっきりした輪郭線と平坦な色面で省略したかたちを表し、引き算の構図と明快な色彩設計で創りだしたものであることが明らかである。若山は、絵本の絵は、「あまさの裏側に、あまさではない、ウルサイくらいの構成力があるわけですね」^{ix}と記している。

若山は、絵本の仕事においても、水彩や色鉛筆やリトグラフなど様々な技法や美しいタッチを駆使した。また、大胆なトリミングで絵画的な空間を際立たせ、緩急のテンポが生じるようにイメージを創造し、ページをめくった時に効果的な場面展開をしている。紙芝居の仕事で会得した画力は、絵本の仕事の強みとなった。

若山は念願の絵本作家となってからも、紙芝居の仕事を最後まで続けた。絵本の功績の陰に隠れがちだが、紙芝居は若山の創作のもう一つの頂である。

4. 創作絵本デビュー作『きつねやまのよめいり』に込められたもの

作者オリジナルの物語で絵も文も一人の作家が手がけたものを「創作絵本」といい、絵本作家の目標の一つとされる。若山の初の創作絵本『きつねやまのよめいり』（1968）は、淡い中間色の山々の上を行くきつねの一家が人間の自然破壊に翻弄されるさまを描いたも



fig.8 『はるのこぐま』童心社、1960
（子どもの文化研究所蔵）
上：若山が描いた原画
下：画工が起こした版で刷った印刷物



fig.9 『はるのこぐま』童心社、1960
（子どもの文化研究所蔵）



fig.10 『こぐまのクリスマス』童心社、1964（子どもの文化研究所蔵）

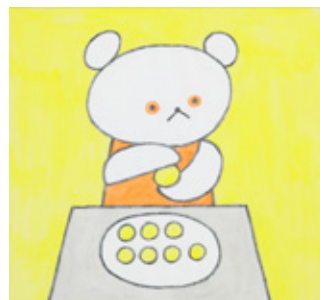


fig.11 「こぐまちゃん絵本」下絵
原画（部分）、1970（こぐま社蔵）

の。いちばんめのきつね、にばんめのきつね…というくりかえしの言葉のリズムが、抑えた色数とともに心に沁み、最後のページに深い余韻を残す。横長の判型に‘間’のある構図 (fig.12) で、文字の色は黒ではなく柔らかなグレー。文字と絵のハーモニー、柔らかな和紙を思わせるコットン紙の風合いまで、きちんと計算された本当に美しい絵本である。同書はサンケイ児童出版文化賞推薦、原画はブラチスラバ世界絵本原画展 (BIB) に展示された。

きつねの一家の行く手をさえぎる鉄道、高速道路、スキー場などは、高度成長期の県土を想起させる^x。経済優先の開発を進め、生きものたちが追いやられていく状況は、発行後半世紀以上経った今も解決せず悪化すらしていることを考えさせられる。良質な絵本は、一般書では考えられないほど長いスパンでロングセラーとなり、情報が奔流する現代において、普遍的なメッセージを世代を超えて伝えられるメディアである。同書は、声高に主張するのではなく、静かに優しく語りかけるようなメッセージ性があり、今なお色褪せないデビュー作である。

若山は、自身の作品のなかで本作がとりわけ気に入っていた。『かばのさかだち あいうえお』(1978)、『からすからす かんざぶろう』(1979)、『ゆきやこんこん』(1981) の3冊を共作した詩人の吉田定一(1941-)は、本作を「ポエジーがある」と評する。若山の創作の特徴の一つは、感覚に深く根ざして抒情性を湛えた、温もりのある‘詩情’にあるといえるだろう。小説の世界では「デビュー作にその作家の全てが入っている」等とよく言われるが、まさに本作には若山の美質が詰まっている。

5. こぐまちゃんとしろくまちゃんへ

1960年代、ブルーナの「うさこちゃん」シリーズが日本に入ってきた。それまで、日本の絵本はアンデルセンなどの翻案や昔話の再録に線描や水彩の絵をつけたものが主だったが、色面で表す絵は大きな影響を与え、出版各社は乳幼児という新しい読者層に向けた創作に意欲を燃やした。

こぐま社の社長の佐藤英和(1928-2022)もまた自分たちの手で日本の子どもたちのための絵本をつくりたいと考えていた。「タブローとは違って、コミュニケーションできる、語りかける絵の描ける人をずいぶん探してきた」という佐藤は、『きつねやまのよめいり』の創作を通し、「こぐまちゃんえほん」に若山を抜擢する。その理由を、「日本の文化を大切にする方なんです。特に日本の色を大事にする方」^{xi}と後に語っている。

その狙いどおり、幼い子が好む色であっても、赤・青・黄の派手な原色ではなく、こっくりとした微妙なニュアンスのある色とその響きあい提案された。柔らかな感受性の子どもがはじめて出会う視覚芸術・絵本としてふさわしいものであった。

若山が起用されたのには、もう一つ大きな理由がある。よく知られるように、「こぐまちゃんえほん」シリーズは4人によるチームの「合議制」で作られている。歌人・教員で後に『はらぺこあおむし』の翻訳を手掛ける森比左志(1917-2018)がことばを、児童劇作家の和田義臣(1913-2006)がドラマ性のある展開を考え、編集を担当した社長の佐藤はそこに、「みな大変個性が強いものです。みんなで話し合って作るということを思い浮かべたとき(中略)デザイナーというのは、話し合って仕事することに慣れて」^{xii}いるからと、「グラフィックデザインの世界から絵本の世界に入って活躍していた」^{xiii}「新進のデザイナーだった若山憲」^{xiv}を画家として提案したのである。1956年の『こどものとも』刊行以来、美術団体である二科会や新制作、行動美術協会などから画家を起用することが多かった福音館書店との対比が興味深い。メンバーの中で最も若い若山は、彼らの意見を取り入れ、ともに研究を重ねながら、あの造形を生み出したのである。若山らは、乳幼児のための絵本という分野を開拓し、その一角をつくった。

絵本の質には印刷が深く関わってくる。「こぐまちゃんえほん」シリーズはリトグラフ



fig.12 『きつねやまのよめいり』(1978年改訂新版)より、こぐま社、リトグラフ(こぐま社蔵)

形式による特色印刷のため、画家本人が各色の原画版（6色分）を描き分けるという、現在では考えられない手間のかかる創作方法で、若山のクラフトマンシップに依るところが大きい。リトグラフ方式の効果は、生きいきとして明るい色彩だけでない。こぐまちゃんの目のオレンジが体色のグレーにわずかにみ出すように刷られており、瞳の潤みを感じさせる表現となっている。

一見マジックで引いたようにみえる太い輪郭は、鉛筆でかたちをとった後、2ミリの隙間をあけて2本の線をひき、その間を墨で塗りつぶすという、手間のかかる方法で描かれている。若山の妻・智恵子夫人によれば、デザイナーの仕事をしたときに使っていたカラス口で2本の細い線を引いており、とても時間がかかったという。このような一定の幅と調子で安定して線を引くことは相当技術が高く、かつその線は、ややゆるぎをもちあたたかみがある効果を生んでいる。

『しろくまちゃんのほっとけーき』が読み継がれる秘密はいくつもあるだろうが、一つは良い香りをさせながらぶつぷつと焼けていくホットケーキを見つめる幸せな時間や、卵を落して割ってしまうなどの小さな失敗に、どの子も実感を重ね合わせられること、もう一つはおうちのひと協力しながら食べるものをつくり、大好きな人とおいしいものを分けあって食べ、お皿を自分たちで洗うまで、普遍的な幸せと幼い子どもの冒険と自立が描かれていることである。特に後者は、若山が大切にしていたことだ。

若山のもう一つの創作絵本代表作である「おぼけのどろんどろん」シリーズ（1980-1986）では、母とはぐれた寂しがりやのおぼけが別れや出会いを繰り返しながら成長していく。また、民衆に愛されてきた玩具を主人公にし、東日本大震災をきっかけに復刊された『あかべこのおはなし』（1980）も、主人公の冒険と成長を日本的な中間色が包み込んでいる。一貫して流れるのは、仲間と協力しながら、自立して自らの人生を歩んでいってほしいという願いだ。

6. 誰もが絵本を楽しめるように一地域の図書館設立運動に尽力

本項以降は、絵本以外の、若山のこれまであまり知られていなかった側面について述べる。

練馬区立大泉図書館は、住民の運動が行政を動かし地域の力でできた図書館として知られる。若山は、住民団体「大泉に地域図書館をつくる会」の代表を務めた。「つくる会」は、絵本を読む勉強会などを続け、検討会を何回も開いて要望をとりまとめ、住民と行政の懇話会は18回も重ねられた。

待望の図書館開館に向け、「つくる会」は2年も前から「あと2年で大泉に図書館ができます！」（fig.13）というリーフレットを制作し、若山がデザインをしている。続く「らいねん2月に大泉に図書館が誕生します」（fig.14）は、仮称練馬区立大泉図書館準備室が発行し、若山による母カンガルーのおなかの袋に子カンガルーが入って親子で本を読んでいるイラストに歓迎の思いが伝わってくる。思わず行きたくなるようなこのリーフレットは、官民協働で近隣各戸に配られた。

「2月1日に大泉図書館が開館します」では図書館でどんなことができるのか挿絵とコメントがついた館内案内図（fig.15）、開館時には、告知ポスター（fig.16）や大泉図書館の開館を祝う会による「できたよみんなのとしょかん」という三つ折りリーフレット等も手掛け、情報を分かりやすく伝えるデザイナーの腕が発揮されている。このように、印刷発行物一つとっても官民が協働するかたちで大泉図書館は動いており、その要で若山は尽力を惜しまなかった。

設計にあたっては、若山はインテリアにも助言も行った。

建設準備中に行政側で奔走した図書館長が開館と相前後して亡くなった際、遺族からの申し出を受けて、外国絵本を購入することになった。自宅に多くの外国絵本を持っていた若山がアドバイスをして当時珍しい書籍を収集し、現在でも同館で多くの人に愛読されている。

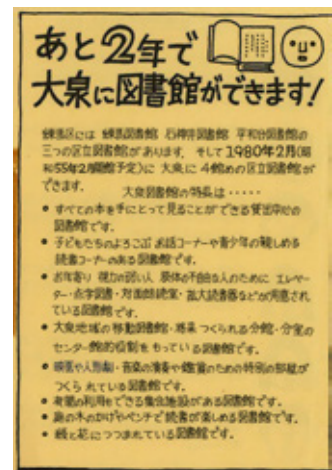


fig.13 「あと2年で大泉に図書館ができます！」表紙



fig.14 「らいねん2月に大泉に図書館が誕生します」表紙

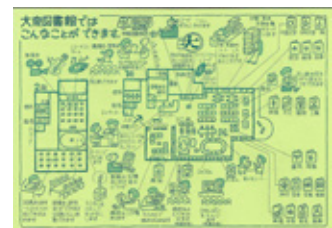


fig.15 「2月1日に大泉図書館が開館します」内面



fig.16 「告知ポスター」

少年の頃、出版が規制されていた戦時体制の経験から、そして荒廃した駅の売店で『週刊少国民』に出会い、田邊に絵の世界をひもといってもらったように、若山は「現代では図書館が、子どもたちが日常的に美しい絵本に触れられる機会や出会いの仲立ちの役割を担う」と信じていたように思われる。

7. 人を育てる ― 雑誌や専門学校で

1973年、絵本の評論や作家育成を目的とする『月刊絵本』が創刊された。編集委員は、若山、田島征三(1940-)、古田足日(1927-2014)だった。若山は創刊号から「表紙構成」をしばらく担当し、「編集ブレーン」も務めた。また、絵本の創り方を様々な角度から指南・解説する「おしゃべり絵本講座」など人気連載を担当した。同誌が企画する合宿型の「絵本の学校セミナー」での講評や、同誌が募集した作品の選評では、若山らしい丁寧な言葉でありつつも鋭く批評しており、絵本制作に対するぶれない真摯さが現れている。

若山らが牽引した1970年代の日本の創作絵本黄金期の豊かな絵本環境に恵まれて育った子らが成長した1980年代には、「絵本」と名の付く学校やコースに、多くの学生が集まった。高田馬場の日本児童文学専門学院(現・日本児童教育専門学校)で、1982年の開校時から2001年までの約20年間、若山は講師を勤めた。就任は52歳、創作絵本「おばけのどろんどろん」シリーズ三部作や『あかべこのおはなし』が刊行された頃である。第一線の絵本作家が毎週欠かさず授業をもったことから、絵本創作を志す若者たちへの若山の思いが伺える^{xv}。

同校では、絵本創作の授業は2クラスあり、『ねずみくんのチョッキ』をはじめとする「ねずみくんの絵本」シリーズの作者なかえよしを(1940-)と若山が担当した。若山のクラスは絵本について清談する和やかな雰囲気だったという。若山の考案した課題で、「矢印だけで絵本ができれば面白いと思いませんか」と問われたことに刺激を受け、学生は様々なアイデアをノートに記した。現在絵本作家として活動する卒業生は、そのノートを今でも保存してあるという。自由度の高い課題を通じ、学生の自主性と気づきを促す指導を重視していたことがわかる。

当時絵本先進地だった日本の絵本文化が東アジアに刺激を与え、毎年韓国や台湾からの留学生が入学していた。韓国からの留学生・張連秀は、ある絵本の絵柄を「怖くて嫌」と批判したときに、「その絵はあなたに何かを伝えたのですよ」と柔らかに窘められた。張は「感情を伝える絵の大切さを教えられた」と振り返る。また、動物園に写生にいったところ、「見て描いちゃダメですよ」と諭されたことも印象深いという。もちろん適当でいいということではなく^{xvi}、「逐一本物を見ながら写さなくても、いつでも絵を描けるようにというプロの仕事のあり方を教えてもらった」と述懐する。

学生を非常にかわいがり、沿線にあった子ども文化研究所の研究会に学生を連れていき、食べ盛りの学生には喫茶店ルノアールでサンドイッチをごちそうした。仕草やもののいいがやさしく、職員にも丁寧に接した。締め切りに遅れたこともなかったという。職員は、「今だから言えるが、成績評価が全員Bだった。AやCをつけたことがない。『完璧はないんだよ、みんないいんだよ』と言っていた」と回想する。

若山が教職を辞してから20年以上経つにもかかわらず、多くの学生・職員が若山の思い出を語りに集まったことから若山の人徳を知ることができる。絵本関係の仕事に従事している卒業生も多い。教育者としての資質は、若山を語る上で重要である。

8. 詩と日記

若山は、自身でも詩画集を1冊上梓するほど詩を愛した。詩誌『野火』の表紙は、主宰・高田敏子(1914-1989)と廃刊までやり切る約束をしていたといい、1967年から1989年

まで22年にわたって手がけた。美しくあたたかな色と簡潔な線で構成された表紙からは、2色刷りで表現される印刷の効果を知り尽くした若山が、楽しみながら思い入れをもって取り組んだ仕事だったことがわかる。

「こぐまちゃんえほん」シリーズの誕生時、ちょうど2歳だった若山の長男の成長絵日記を編集会議で見ながら、キャラクターの日常生活が紡ぎだされた。

若山は‘日記’をよく書き、食卓には家族用の交換日記が常に置いてあった。家族との愛情あふれる交換日記は、1970年から2006年まで長く続いた (fig.17)。初期は、若山が手書きのイラストを表紙にして紙を束ね、リングで綴じた手作りの冊子で19冊、その後は白い合皮表紙の日記帳になり、15冊あることが確認されている。家族日記とは別につけていた個人のノートには、家族旅行の地図、妻への感謝、二人の子らの成長がしたためられた。几帳面でまじめな人柄らしく、気温や降雪量、折々の思いやメモも丹念に細かな字で記されている。日々積み重ねられる小さなスケッチや、愛おしい日常や家族への深い思い、季節や出会いの機微が、制作の全てにつながっていった (fig.18)。

若山が残した膨大な日記類には、制作の過程や絵本関係者との交友、時々の思いが詳細に綴られており、若山研究において極めて重要な資料である。今後の詳細な調査が期待される。

9. おわりに

—「子どもに見せるものは最高級のものにしないといけない」^{xvii}

岐阜時代のデザイナー経験は、若山に絵の世界への扉を開いた。また、文字と絵のバランスや配置まで細やかに鋭いセンスで考えぬくタイポグラフィ、リトグラフ原画等に必要な色指定や色別原画の描き分けという印刷技術への知見^{xviii}、他者と共同での仕事の進め方など、その後の全ての基礎となった。

紙芝居の仕事では、想像力をひきだす画力が鍛えられた。「こぐまちゃんえほん」シリーズの印象に隠れがちだが、若山の特徴は、作品ごとに最も適した表現を用い、画風を多彩に変化させていることだ。これは、同時代のほかの作家と比較しても特徴的であり、デザイナー経験からオーダーと時代性に応える資質が養われたと思われるが、そこには、一貫して、鍛錬した技の凄み、穏やかで可憐な品がある。

若山は、直接的に戦争を作品に描くことはなかったが、随筆や日記には度々書き残し、同時にかけがえのない日常への感謝が綴られている。

本稿を執筆中の2024年元旦、能登半島を地震が襲った。若山は、1982年1月の日記に「お正月三日間火事にならず地震もおきず大水もこず病気にもならず事故にもあわずケンカもおきず (中略) 平和をありがたいもんじゃのう」と記している。戦時から40年近く経っても抱き続けていた思いだ。

後進を育て、絵本作家の地位向上や著作権の確立、図書館建設にも献身的に関わる行動力など、絵本を取り巻く社会環境への貢献も大きい。その根底には上質な絵本を子どもたちに届けたいという願いが流れていたことが、若山の足跡を辿ることによって明らかになった。若山の多くの仕事によって、日本の絵本界はより豊かなものになったといえる。若山の全貌を見渡し、若山の歩みを探ることは、日本の絵本史の発展とも重なるものである。今後さらに検証していく意義があるであろう。

幼少時の体験の幅を広げることはその後の人生をより豊かにしていく。が、今日、生育環境による子どもたちの「体験格差」が社会課題となっている。美術館に子どもを連れて来る機会をつくりたいというのも、「こぐまちゃんとしろくまちゃん 絵本作家・わかやまけんの世界」展企画の一つの動機であった。絵本はかけがえのない日常を大切にできる、幸せと自立の象徴という若山の思いを受け継ぎたい。



fig.17 家族の交換日記

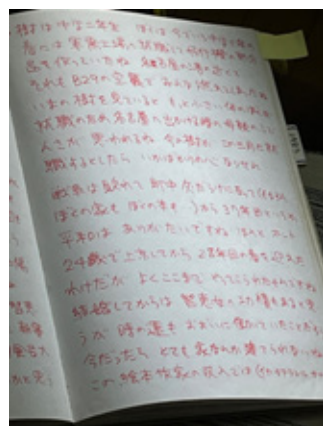


fig.18 1982年の日記。中二になった長男、同じ年頃の自身の戦争体験から母を思いやり、燃えてしまった本への言及から「平和はありがたいですね」、妻や時の運への感謝を記す。日々の若山の思考が肉声から伝わる。

〈謝辞〉

本稿は、若山氏の貴重な日記や関係者のご証言に大きく助けられている。最後になりましたが、調査に多大なるご協力をいただいたご遺族と関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

-
- i 若山憲「発想が定着するまで『きつねやまのよめいり』灯と雪ときつね」『月刊絵本』1973年10月号、盛光社、p.46
 - ii 2023年4月17日の若山生家附近踏査による。
 - iii わかやまけん「少年産業戦士の敗戦」『子どもの文化』1985年8月号、一般社団法人文民教育協会子どもの文化研究所、pp.37-38。他に「ぼくの家も僕の本も…」(1982年正月の日記)等
 - iv 若山憲『絵本の見かた創り方』1975年、すばる書房、p.7
 - v わかやまけん「あの頃のこと」『日本童画会会報』第79号1962年6月、日本童画会、pp.23-33
 - vi わかやまけん「わかやまけんのおしゃべり絵本講座第11章絵本づくり(エピソード)」『月刊絵本』すばる書房、1975年4月号、p.54
 - vii わかやまけん「田辺四郎氏」『子どもの文化』1983年6月号、一般社団法人文民教育協会子どもの文化研究所、p.7
 - viii わかやまけん「表紙のことば」『保育の友』1991年4月号、全国社会福祉協議会出版部
 - ix 若山憲『絵本の見かた創り方』1975年、すばる書房、p.130
 - x 若山自身も、1971年の随想で、「いまや城下町岐阜も発展に発展を重ね、山をけずり、田畑をうずめ、緑の自然を遠に追いやっている。(中略。長良川の流れには)去年は何千という鮎を一夜にして白く浮かせてしまったと聞いた」(『子どもの文化』1971年11月、一般社団法人文民教育協会子どもの文化研究所、p.19)と書いている。
 - xi 『クーヨン』クレヨンハウス、2000年7月号、p.10
 - xii 佐藤秀和「こぐま社創立40周年記念講演抄録「こぐまちゃんえほん」のできるまで」『こぐまのともだち』No.36、2006年7月、こぐま社、p.3
 - xiii 「こぐまちゃん誕生40周年記念特集〈1〉「こぐまちゃんえほん」シリーズ誕生まで」『こぐまのともだち』No.47、2010年春、こぐま社、p.7
 - xiv 東京子ども図書館機関誌『こどもとしょかん』「こぐま社創業者・佐藤英和さんにきく」No.124、2010年、p.15
 - xv 同校講師と並行して1980年代から一定期間、高田馬場の日本児童文化専門学校でも教鞭をとっている。詳細期間は不明。
 - xvi 若山は「絵を描くための取材やスケッチなどはタンネンにしてほしい」と書いている(『絵本の見かた創り方』第11章「原画を描く」p.16)。また、『こぐまちゃんどうぶつえん』制作時には、何度も動物園に出かけている。
 - xvii わかやまけん『子どもの文化』1986年3月号、一般社団法人文民教育協会子どもの文化研究所
 - xviii 「こぐまちゃんえほん」シリーズの技法について、佐藤は「リトグラフ手法」と説明することが多いが、若山はデザイナーらしく「アミ版(筆者注:孔版)ではないのでインクや製版のムラがなく一段と色彩がはえてしつとりとなる(中略)このような印刷方法を(凸版式)とか(色分け方式)とか(特色方式)とかいってデザインの世界ではふつうのこのように使われている技法のひとつ」(『わたしの技法』『月刊絵本』1975年10月号、盛光社、p.35)と説明をしている。

インタビュー調査

本稿に関わるインタビュー調査は、下記の方々に以下の日程で取材を行った。また、適宜、メールや電話等で事前調査・追加調査を行った。(敬称略、順不同)

若山樹(若山憲長男)・若山智恵子(若山憲妻)、2023年6月18日・9月10日、若山憲仕事場(練馬区)にて
内田かずひろ(日本児童文学専門学院絵本創作専攻科1985年3月卒業)・武田眞祐美(幼児保育専攻科1986年3月卒業、日本児童教育専門学校事務局)・加藤初音(絵本創作専攻科1986年3月卒業)・張連秀(絵本創作専攻科、1997年3月卒業)・なかむらしんいちろう(絵本創作専攻科、1997年3月卒業)・山田花菜(絵本創作専攻科、1997年3月卒業)・大田理恵(絵本創作専攻科 2001年3月卒業)・三浦知義(元日本児童教育専門学校事務局)、2023年4月19日、日本児童教育専門学校にて
小野寺昌子(練馬区立大泉図書館長)、2023年6月18日・10月7日、練馬区立大泉図書館にて
加賀美裕子(浜中文庫を楽しむ会代表)、2023年9月9日、岐阜県美術館にて
加藤由朗(加藤孝司長男)、2023年4月17日・6月27日・10月4日、元・加藤孝司デザイン事務所(岐阜市木造町)にて
小林良之(小林良一長男)、2024年2月2日、岐阜県美術館にて
鈴木孝子(一般社団法人文民教育協会)・吉田定一(詩人)、2023年4月19日、子どもの文化研究所(豊島区)にて
関谷裕子(こぐま社元編集長)、2023年9月9日、岐阜県美術館にて

参考文献

岐阜市美術展覧会50年記念誌編集委員会『岐阜市美術展覧会50年記念誌』1998年、岐阜市教育文化振興事業団
岐阜市展目録第4回～第6回
堀内誠一『絵本の世界 111人のイラストレーター第1集』1984年、福音館書店
松浦昇「日本のパイオニア世代のポスター研究」『金沢大学教育学部紀要(人文科学・社会科学編)』第49号、2000年、金沢大学教育学部
宮城県美術館(ほか)編『はじめての美術 絵本原画の世界』2002年、NHK東北プランニング
佐藤英和『絵本に魅せられて』2016年、こぐま社
瀬田貞二『絵本論 瀬田貞二 子どもの本評論集』1985年、福音館書店
高橋洋子 編著『教育紙芝居集成高橋五山と「幼稚園紙芝居」』2016年、国書刊行会
鳥越信編『シリーズ・日本の文学史4はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅲ―戦後絵本の歩みと展望―』2002年、ミネルヴァ書房